

活動名 次代を担う子ども育成プロジェクト 幕末体験「育英塾」	団体名	幕末体験「育英塾」実行委員会
	地域	山口県萩市
	代表者	会長 椋 晶雄
	支援金額	20万円
活動概要		
<p>萩市須佐地域は、山口県の北部に位置し、過疎・少子・高齢社会の進展に依然として歯止めがきかない状況下にある。幕末の舞台となった萩市の中でも、永代家老益田氏により創られた須佐地域には、幕末の志士たちが残した文化や歴史などが多く残されている。中でも幕末の志士たちの学び舎であった郷校「育英館」は、藩校明倫館とともに長州藩の重要な教育施設であり、多くの志士たちを輩出した。しかし多くの歴史や文化などを持ちながら、子ども達は郷里の歴史や文化に触れることなく、ただ家庭から小学校～高校への通学生活を送り、何も郷里の歴史や文化を知ることなく都会へと旅立っていく。生まれ育った地域を知ることが、郷土愛を育むために最も必要な事である。</p> <p>また、一昨年(平成25年7月28日)に発生した豪雨災害では、育英塾の会場である須佐歴史民俗資料館「益田館」も約2.5m浸水し、濁流は大きな爪痕を残す結果となったが、平成27年10月に修復が完成し、再び益田館で3年ぶりに育英塾を開催することができ、子ども達は幕末時代にタイムスリップし、幕末の志士たちと同じ学習活動を行った。</p> <p>◆実施時期 10/1～11/30 場所：育英小学校および須佐歴史民俗資料館「益田館」</p> <p>◆参加人数 子ども 17名(男 10名、女 7名)、教職員・保護者 12名 指導者 4名、実行委員 8名</p> <p style="text-align: right;">参加総人員:延べ 82名</p>		



11/18 育英塾① 授業風景



11/20 育英塾② 書道の授業



11/20 育英塾② 剣道の授業



全員で記念撮影

◆実施に伴う効果

元気な子ども達の声が、被災の地に3年ぶりに帰って来た。育英塾を体験する子ども達(小学6年生)は、もちろん初めての体験。塾の講師役の先生方も久々の講義にかなり緊張気味であった。受講生たちは、幕末には、かの伊藤博文や品川弥次郎、久坂玄瑞等が交換塾生として、育英館で講義を受けていたことに色んな思いを馳せたことが、後に提出された感想文からも読み取ることが出来た。この塾を通し、大河ドラマには登場しなかった須佐が、「幕末・明治維新を支えた素晴らしいところだ」との郷土意識を感じさせることが出来たことは大きな効果の1つと考える。

過疎・高齢・少子化と地域を取り囲む諸問題は多々あるが、次代を支えてくれるのは地域で生まれ育った子ども達。その子ども達に地域意識(郷土愛)をいかに植え付けるのは、やはり地域の力しかない気がする。その意味では、微力ではあるが、こうした体験こそが地域の誇りとして育っていく子ども達には必要ではないかと考える。

また、この塾を開催するにあたり、学校や地域の方々が実行委員会を組織化し、子ども達のバックアップをしたことは、今後の大きな地域のエネルギーになりそうである。学校・地域・家庭が一体化することが、地域の活性化や教育委員会が進めるコミュニティスクールへの近道でもある。今回の塾終了後の反省会では、単なる須佐だけの事業ではなく、次年度からは志ある者は他地域も受け入れたらとの声もあり、実現の方向で実行委員会で検討を進めている。

◆苦勞した点

・行事日程調整

会場である須佐歴史民俗資料館「益田館」改修工事の終了日程、学校行事日程、地域行事日程など何かと行事の多い秋季、結局すべての日程が合ったのは11月下旬となった。最終的には、天気にも恵まれる結果となった。

・子ども達の学習方法

単なるイベントで終わることなく、価値ある塾を行いたいとの指導者の意向もあり、今年は2回に分けた学習活動で、徹底した郷土学習を行うこととなった。また、一つ一つの諸作法についても、礼の仕方一つについても「感謝」という気持ちをどう伝えるかを子ども達に教えることの難しさを痛感した。

・塾開催に伴う諸道具調達

幕末の雰囲気醸し出すための諸道具の調達には予想外の苦勞があった。

①机/豪雨災害で水没した昔の長机を清掃・修理で、不足分は既製の机でカバー。

②衣装/被災した衣装は洗濯、不足分は寄贈募集、購入でカバー。

③藁草履/育英小学校～益田館間の登塾で履く藁草履は、地域で作る人がいなくなった。

◆今後の課題・発展の方向性

幕末には、吉田松陰の影響を大きく受けた郷校「育英館」。元々は武士の子弟教育を重んじていたが、幕末には「志」ある者の入校を認め、多くの志士たちを輩出した。当時の思いを育英塾に反映するのであれば、「志を持って入塾するものは拒まない」との思いで、次年度からは須佐に限らず、他地域からの受け入れを検討することとした。萩市内では、なかなかこのような体験はできない。須佐で体験し、萩市内で観光も良いのではとの思いも実行委員会にある。

◆活動を終えての感想・意見等

須佐歴史民俗資料館「益田館」の再開館こけら落とし的な事業となったが、この育英塾は単なるイベントで終わるのではなく、基本は「次代を担う人材を育成する」ことである。難しいことではあるが、「誰かが何かを感じてくれれば・・・」必ず地域も変わるはず、夢のような話ではあるが、幾世も時代はこんな夢から変わった気がします。子ども達に夢を与えることが、私達大人の仕事であり、役割だと考えます。23年間も毎年続いていることに、携わって来られた皆さんの努力と協力に感謝したいと思います。

今回の大災害、今まで経験したことのない出来事に、自分自身も大きな痛手を被り、未だに元の姿に帰ることが出来ませんが、こうした事業を展開することで、子ども達やスタッフの皆さんを支えに一步步元に戻ろうとしているのではないかと思います。色々ご支援ありがとうございました。